

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集

市内遺跡発掘調査概要報告書Ⅹ

日向国分寺跡

2005

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市教育委員会では、市内遺跡発掘調査事業として平成7年度より日向国分寺跡確認調査、また、平成10年度から西都原地区遺跡の調査を実施してまいりました。

昨年度までに西都原地区遺跡の発掘調査は終了し、今年度は日向国分寺跡の調査と日向国府南側の低湿地の試掘調査を実施いたしました。

今回の調査で日向国分寺跡では、一昨年度までの調査で3時期にわたる中門跡及び主要伽藍に取り付く西門跡、中門跡から東西に延びる2時期の回廊跡、北東側に2時期の推定食堂跡などを確認しております。また、昨年度は推定講堂跡の西半分を検出するなど大きな成果をあげることができました。

今年度は金堂跡の確認を最大の目的に調査を実施いたしました。残念ながら金堂跡の痕跡を残す遺構や金堂に取り付く可能性が予想された回廊跡は検出できませんでした。しかし、推定講堂跡の北西側から以前までの調査で確認してきた回廊に並行する区画溝が西門北側に東に折れること、また、その溝が講堂の背後を廻るものではなく途中で途切れていることなどが明らかになりました。

また、日向国府跡の南側低湿地は、水田等の農地として利用されている箇所を埋め立てたいとの地元からの要望があげられました。しかし、昭和48年度の西都市立妻北小学校のプール建設工事の折に、現在までに県内で1例しか確認されていない日向国を記した木簡が出土した経緯があったことから試掘調査を実施致しました。

この調査では少量の土器片等が出土したのみで、遺構や木簡等の発見はありませんでしたが、国府域の性格を検討する上で有意な成果をあげることとなりました。

これら調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なことであります。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたりご指導・ご協力いただいた調査指導の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査・整理作業に携わっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成17年3月31日

西都市教育委員会

教育長 黒木康郎

例 言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受け、平成16年度実施した市内遺跡発掘調査（日向国分寺跡）の概要報告書である。
2. 平成16年度の調査は、西都市大字三宅字岡分に所在する日向国分寺跡の5地区の確認調査、また、西都市大字寺崎字剣田に所在する低湿地の試掘調査を実施した。調査は平成16年4月26日から平成17年2月1日まで実施した。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査及び図面作成等は、釜瀬明宏が担当した。遺構のトレースは釜瀬明宏・長谷川明美が実施した。
5. 本書の執筆・編集は、釜瀬明宏が担当した。
6. 本書に使用した方位は、Fig. 1・2・8が平面直角座標系第Ⅱ座標系であり、Fig. 3～7は磁北である。
この地点の磁北は真北より6° 10′ 西偏している。
7. 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
8. 本文中の(註)は第Ⅱ章に全てをまとめて記した。

目 次

第Ⅰ章 序 説	
第1節. 調査に至る経緯	1
第2節. 調査の体制	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第Ⅲ章 日向国分寺跡の調査	
第1節. これまでの調査結果と概要	5
第2節. 調査区の設定と遺構	7
第3節. 小 結	12
第4節. 日向国分寺跡伽藍地割について	13
報告書抄録	

挿図目次

Fig. 1 日向国分寺跡周辺位置図 (s=1/25,000)
Fig. 2 日向国分寺跡第10次調査箇所位置図 (s=1/1,000)
Fig. 3 日向国分寺跡第10次A区遺構実測図 (s=1/100)
Fig. 4 日向国分寺跡第10次B区遺構実測図 (s=1/100)
Fig. 5 日向国分寺跡第10次C区遺構実測図 (s=1/100)
Fig. 6 日向国分寺跡第10次D区遺構実測図 (s=1/60)
Fig. 7 日向国分寺跡第10次E区遺構実測図 (s=1/200)
Fig. 8 日向国分寺跡伽藍地割想定図 (s=1/1,000)

第I章 序 説

第1節. 調査に至る経緯

日向国分寺跡の調査は、西都市教育委員会が調査を始める以前に過去3度の調査が実施された。それは、昭和23(1948)年度に駒井和愛教授を団長とした、主として早稲田大学で組織された日向考古調査団¹⁾、その後、昭和36(1961)年度には九州大学及び宮崎県教育委員会、平成元年度には宮崎県教育委員会による確認調査である。

しかし、それら調査では主要伽藍配置について明確にされておらず、平成元年度の調査で僧坊跡ないし食堂跡と推定される2時期の掘立柱建物跡が確認された程度であった。

当地域は、昭和36年度当時の周辺写真と現在を比較すると寺域内外の宅地化が著しく、伽藍配置の確認が急務となった。このことから、西都市教育委員会は平成7年度より国庫補助を受け、日向国分寺跡の主要伽藍配置及び寺域の確認調査を実施してきた。今年度も、この継続事業として確認調査を実施した。

一方、妻北地区の低湿地の試掘調査は、昨年度、土地地権者から本地区の埋め立て工事を実施したいとの旨の陳情が西都市長になされた。本地区は西都市の文化財包蔵地に含まれていなかったが、昭和48年度の西都市立妻北小学校のプール建設工事の折に荷札木簡が1点出土した地区であったことから、土地地権者に試掘調査の協力を依頼し、調査を実施した。しかし、調査の結果、調査地は数10メートルにも及ぶ泥炭層が堆積しており、少量の遺物の流れ込みが認められた程度で遺構等は確認できなかったことから、本概要報告書からは割愛した。

第2節. 調査の体制

調査主体	教 育 長 黒 木 康 郎 文化課長 森 康 雄 同 補 佐 村 岡 満 徳 同 係 長 養 方 政 幾 同 主 査 重 永 浩 樹 同 主 事 津 曲 大 祐
調査員	同 主 事 釜 瀬 明 宏
調査指導	口 高 正 晴 (西都原古墳研究所長) 石 川 悦 雄・和 田 理 啓 (宮崎県教育庁文化課)
調査作業員	押川ツル・金丸美保・川野照夫・佐伯民孝・椎葉重満・椎葉智佐子 ・横山ナオ子 (以上、発掘作業員) 中原昭美・長谷川明美 (以上、整理作業員)

以上、敬称略

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西、標高50～80mには通称西都原^{さいとびる}と呼ばれる台地がある。この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積世台地で台地東側には南北帯状に標高約20～30mの中間台地が延び、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。西都市街地はこの沖積平野に位置し、この平野の北から東側を宮崎県で第3位の水量を誇る一ツ瀬川が蛇行する。

西都原台地及び中間台地上には、陵墓参考地である男狭穂塚^{おさほづか}・女狭穂塚^{めさほづか}を始め、前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された国指定特別史跡・西都原古墳群が所在する。これら古墳の他に、南九州的墓制とされる地下式横穴墓が現在までに12基、斜面に墓道が斜めに穿たれ、それに玄室が取り付く横穴墓と地下式横穴墓の折衷型とされる横穴墓群も確認されている。

西都原台地の北西端には、縄文早期の集石遺構及び後期の土器片・土錘が多量に検出された宝財原遺跡^{たからずみ}、台地北東端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡20軒などが検出された集落跡である新立遺跡^{しんたて}などが所在している。西都原台地が墓域として選地された結果、台地上の生活遺構は極端に減少するが、台地南端^{みなみはら}の寺原集落には古墳時代の大集落跡が所在していることも予想されている。

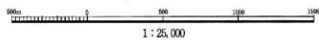
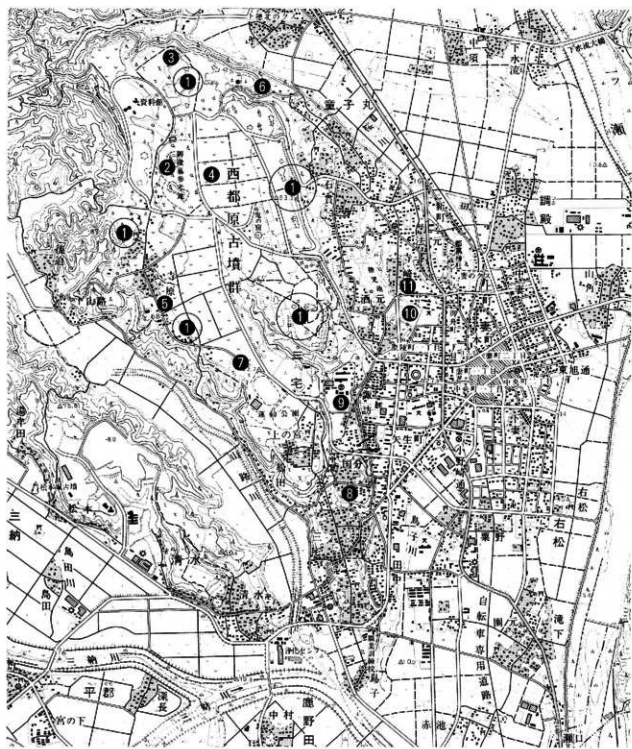
西都原台地北東側の中間台地には、平成12～13年度にかけての調査で地下式墓寄生型消失円墳や消失円墳を始め、多くの地下式横穴墓が点在していることが明らかになった堂ヶ嶋第2遺跡^{どうがじま}も所在する。本遺跡の発見により中間台地一帯が古墳時代終末期の墓域であることも明確になった。

西都原台地の南端には産土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡^{うしろじま}の所在する標高30m程の中間台地になる。この中間台地上には北に日向国府跡、南東の妻高等学校敷地内に日向国分尼寺跡（推定）も保存されている。妻高等学校と日向国分寺跡の間には国分遺跡^{くにわけ}が所在している。この遺跡は地下式横穴墓が2基寄生している地下式墓寄生型消失円墳1基・消失円墳2基などから構成され、第1次調査では平安期の土器片が土地造成土の中から多量に検出された。また、この南側からは以前、石帯が出土した経緯もある。

日向国分寺跡は、上記のような環境の中の西都原台地と西都市街地の西側に延びる中間台地中央に所在する。北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷に囲まれ、寺域は方2町の規模を有すとされてきた。本地域は急速に宅地化が進み、現在、江戸時代中期にこの地を訪れた木喰諭海上人影像の木喰仏^{うきくつ}やそれを以前安置していた旧堂宇の礎石、金堂跡と推定される地点に数個点在している礎石のみが国分寺の面影をそばせる。

国分両寺は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であり、近年、宮崎県教育委員会の調査により国分寺跡から北東に直線距離で約1.2kmの寺崎^{はらうら}・法元地区に日向国府跡が確定された²⁸。国府跡については、正殿と脇殿がコの字型配置をとり西側からは築地塀跡などが確認されている。現在、平成17年度の国史跡指定を目指し準備を進めているところである²⁹。

このように、西都原台地及びその周辺は縄文時代の生業の場、弥生時代の集落とし利用され、古墳時代に墓域として大古墳群が形成された。その後、台地上は墓域として守られ続け、日向国分寺跡や国分尼寺跡、日向国府跡などを含む中間台地は、古代日向国の政治及び宗教活動の拠点として大いに栄えた地域であった。



- | | |
|------------|----------------------|
| 1. 西都原古墳群 | 2. 陵墓参考地 (男狭穂塚・女狭穂塚) |
| 3. 丸山遺跡 | 4. 西都原遺跡 |
| 6. 新立遺跡 | 7. 原口第2遺跡 |
| 9. 日向国分尼寺跡 | 10. 妻北低湿地 |
| | 5. 寺原遺跡 (西都原地区遺跡) |
| | 8. 日向国分寺跡 |
| | 11. 寺崎遺跡 (日向国跡) |

Fig. 1 日向国分寺跡周辺位置図 (s=1/25,000)

(註及び参考文献)

- (1) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949
- (2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺址」『日向遺跡総合調査報告』第3号 1963
- (3) # 『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告』III 1991
- (4) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書I」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996
- (5) # 「市内遺跡発掘調査概要報告書II」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997
- (6) # 「市内遺跡発掘調査概要報告書III」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998
- (7) # 「市内遺跡発掘調査概要報告書IV」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第28集 1999
- (8) # 「市内遺跡発掘調査概要報告書V」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第29集 2000
- (9) # 「市内遺跡発掘調査概要報告書VI」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第30集 2001
- (10) # 「市内遺跡発掘調査概要報告書VII」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第31集 2002
- (11) # 「市内遺跡発掘調査概要報告書VIII」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第36集 2003
- (12) # 「市内遺跡発掘調査概要報告書IX」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第40集 2004
- 03 宮崎県「通史編 古代2」『宮崎県史』 1997
6023型とされる荷札木簡。全長11.2cm、全幅2.3cm、最大厚0.5cmの杉材で両側面に切り込みが入る。墨書は2～3文が記されているが判読は不能である。
- 04 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- 05 西都市教育委員会「宝財原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第20集 1994
- 06 # 「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- 07 # 「堂ヶ島第2遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第33集 2003
堂ヶ島第2遺跡では、玄室数が21基の地下式横穴墓を確認した。それらには単独で構築されるタイプと地下式墓寄生型円墳として、円墳下に寄生的に構築されるタイプなどがある。単独で構築される地下式横穴墓は堅坑降口部傾斜角が徐々に倒れていく傾向にあり、堅坑の意味が「被葬者を玄室内へ入れるために上から下に降ろす坑」から「追葬を行うにあたり墓前祭祀・追善供養などを行う道」へと変化していく課程が想定された。
- 08 西都市教育委員会「上尾筋遺跡・下尾筋遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第11集 1990
- 09 # 「国分第3遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第38集 2004
- 02 江戸時代中期、全図を行脚する木喰勤海上人が日向を訪れた際、国分寺跡に立ち寄った。翌年、火災により荒廃していた伽藍や安置されていた本尊は全て消失してしまった。そこで木喰勤海上人は国分寺再興の祈願を立て、5鉢の彫像に取りかかった。そうして完成した仏像5鉢が木喰仏、つまり、木喰五智如来坐像である。
- 01 宮崎県教育委員会「寺崎遺跡」『国衙跡保存整備基礎調査報告書』 2001
- 02 日向国府跡については約2.0haの国指定を目指しているが、平成17年度はその内の約1.0haを国指定史跡に申請する予定である。その後、残りの1.0haに関しては随時、指定拡大を進めて行く予定である。
- 03 石田茂作『東大寺と国分寺』至文堂 1959
石田茂作氏は寺域と伽藍配置が一致する場合と寺域と伽藍配置が一致しない場合の2案を設定されている。今回、日向国分寺の伽藍地割の復元を試みた結果、出雲国分寺や伊豆国分寺同様に寺域と伽藍地が一致しない場合を想定できそうである。

第三章 日向国分寺跡の調査

第1節. これまでの調査結果と概要

日向国分寺跡については前述のとおり、昭和23年度に駒井和愛を団長とする日向考古調査団、また、昭和36年度及び平成元年度には宮崎県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年度の調査箇所は明示できないが、昭和36年度の調査は旧五智堂及びその南側を中心に、平成元年度は寺域の北側（中央東西道路の北側）の確認調査が実施されている。昭和23・36年度の調査は短期間であったことから伽藍配置については明確にされていない。しかし、平成元年度の宮崎県教育委員会による調査では食堂跡と推定される2時期の掘立柱建物跡が確認された。その後、平成7年度から西都市教育委員会が遺跡保存確認調査を実施し、今年度で第10次となる。

平成7・8年度の調査では、金堂の掘込地業跡と推定される遺構や回廊跡、さらに、回廊外側に廻らされていたと推定される溝状遺構が検出されている。

平成9年度は、主要伽藍西側に取り付くと予想する四脚門跡を確認した。この北側からは南北に延びる区画溝（SF002）も検出でき、この溝は主要伽藍を取り囲むように廻ると想定した。

平成10年度は、平成7年度の調査で確認された並行したピット列が回廊跡と確定し、最低でも3時期の建て替えが明らかになった。また、主要伽藍南側区画溝中央の東西幅が82mと判明した。

平成11年度は、平成7年度にトレンチ調査を実施した中門想定箇所に一辺10m程の調査区を設定し、中門跡東半分を検出した。中門も回廊同様最低3回の建て替えが行われていた。

平成12年度は、金堂の掘込地業想定箇所を再度調査したが、後世の攪乱で地業跡と断定するまでには至らなかった。また、塔想定箇所である主要伽藍南東側では遺構等確認できなかった。南門に関しては築地塀の基壇らしき粘土層が確認でき、調査区東側に南門が所在する可能性が高くなった。

平成13年度は、平成元年度に宮崎県教育委員会が調査した推定食堂跡の未調査箇所を再度調査した結果、2時期の掘立柱建物跡であることを再確認した。但し、推定食堂跡の西側に関しては、平成9年度の調査で現在民家の進入路になっている道路までは延びないことも明らかになっている。

平成14年度は、寺域西端隅の確認調査に限定し、寺域を方2町と想定した場合の隅と予想する箇所及び寺域の南西部に位置する谷の内側で寺域が北東側に曲がる可能性もあることから、合計2箇所に寺域端を想定し調査を実施した。調査の結果、寺域端を示すような遺構は確認できなかったが、想定寺城南西端に国分寺と同時期で地割りも一致するL字状の溝状遺構を検出した。

平成15年度は、寺域内の宅地開発の危機が迫り、伽藍中心部の調査を重点的に実施し、中央建物跡の確認を最大の目的とし調査を実施した。調査の結果、A区から方形及び円形の柱掘り方を有する桁行き7間、梁行き3間ないし4間の推定講堂跡を検出した。また、B区からは方形の柱掘り方を有する東西3間、南北3間以上の掘立柱建物跡を確認し、C区では平成9年度調査の四脚門北側に取り付く円形柱掘り方を検出した。

今年度は、国分寺跡中央を横断する東西道路（市道）の南側に所在する平成12年度に確認調査を実施した旧国分公民館跡をA区、旧五智堂の基壇北側をB区、金堂想定箇所である墓地内の参道をC区、東西道路北側、昨年度推定講堂跡を検出した箇所の北西側をD区、寺域北側の農業用倉庫下及び畑地をE区とし、この5地区を対象に調査を実施した（Fig.2参照）。

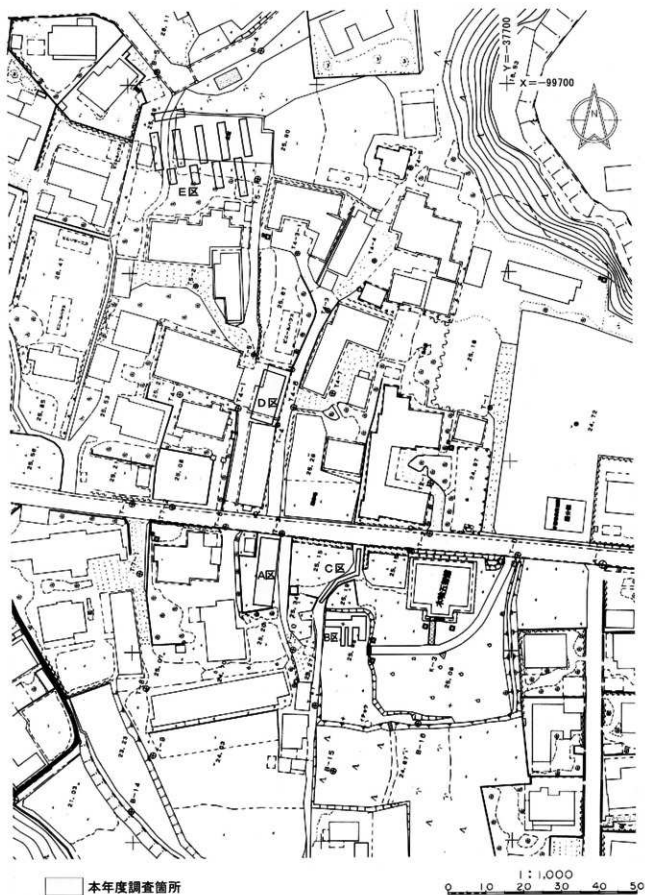


Fig. 2 日向園分寺跡第10次調査箇所位置図 (s=1/1,000)

第2節. 調査区の設定と遺構

《A区の調査》Fig. 3

A区は、日向国分寺跡を横断する東西道路南側、主要伽藍西側の旧国分公民館跡に設定し、調査面積は南北18.0m、東西5.0mの約90㎡とした。

この地点は平成7年度1・2トレンチと平成12年度C区1トレンチとして一度調査を実施したが、トレンチがそれぞれ1.0m幅、3.0×6.0mと狭小であったことから、今回、調査規模を拡大した。

この地点に調査区を設定した理由は、昨年度の調査で講堂跡が東西道路北側に想定できたことから東西道路南側の墓地に金堂跡が所在した可能性が高くなった。このことから金堂に回廊が取り付く伽藍配置を想定した場合、この調査区で回廊跡が確認できれば、墓地一帯が金堂跡と確定できるからである。

調査はアカホヤ火山灰層上層の黒色土上面で遺構検出を実施したが、北東側に隅丸方形プランの近世墓1基を確認した程度であったことから、アカホヤ火山灰層上面で再度遺構検出を実施した。

調査の結果、径50～60cm程度の円形の柱穴痕が8個、径20～30cm程度のビットを13個検出した。大きめの柱穴痕は3個を単位として南北方向に8尺ないしは9尺の柱間で穿たれている。調査区中央に穿たれている柱穴列の西側、約2.1mの箇所には2個のビットが確認できたが、南北方向の柱間と間隔が異なることから掘立柱建物跡になる可能性は薄い。南北方向の柱穴列内からは土師器皿片が出土しているものもあり柱穴列の時期は国分寺に伴う可能性が高く、柵列の可能性がある。また、調査区中央南側にも同様に3個の柱穴が並ぶが、これも上記の柵列と同様の遺構であると予想される。

調査区は平成9年度まで地元の自治公民館が所在していたことから一部トイレ跡などにより攪乱を受けていたが遺構面自体は良好に遺存していた。

調査箇所以西には昭和36年度の調査で北西土壇と呼ばれていた土壇が一部遺存しているが、当時は今回の調査箇所までを含む広い範囲に土壇が遺存していた。この土壇は昭和40年頃に防火水槽及び自治公民館の建設に伴い大半が削平されているが、当時の工事の折りに多くの古瓦片が出土したと地元の方から話を聞いた。この土壇が塔跡の可能性も想定したが、金堂跡の真西に位置することから可能性は薄い。但し、基壇を有した建物跡（経蔵・鐘楼など）の基壇の可能性は残る。

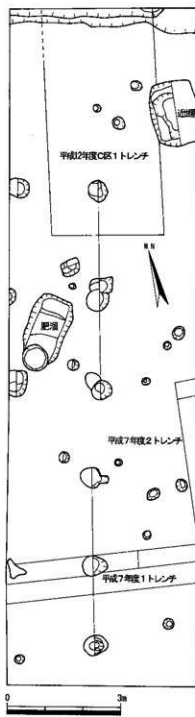


Fig. 3 日向国分寺跡第10次A区遺構実測図 (s=1/100)

《B区の調査》Fig. 4

B区は、昨年度の調査で東西道路北側に推定講堂跡を検出し、東西道路南側中軸線上に金堂跡が位置する可能性が高くなった。このことから、金堂跡の痕跡を検出する目的で現在の日向国分寺跡境内に遺存する旧五智堂跡の基壇北側に調査区を設定した。この地点は、昭和36年度の九州大学・宮崎県教育委員会の合同調査、また、平成7年度の西都市教育委員会の調査で数本のトレンチを設定し調査が実施されてきたが、金堂跡と断定できる遺構等は確認されていない。

今回の調査は、この旧堂宇基壇を一部除去し、その下層での調査を行う予定で開始した。まず、幅2.0m、長さ11.0mのトレンチを設定し、表土を約15cm掘り下げると基壇上面に達し、この面で昭和36年度の10トレンチと平成7年度の8・10・12トレンチの掘り方を検出した。また、トレンチ中央北側から径1.3~1.8mの旧五智堂の礎石掘り方2個を検出した。現在、基壇の上には平成6年度まで所在していた旧堂宇の礎石が所在しているが、今回検出した礎石掘り方はかなり大きく、これらの礎石に伴うものではないと判断したことから、旧堂宇の以前にかなり大きな建物が所在していたと予想できた。この建物は東向きで当初の国分寺の建物とは考えられないが、平成7年度の調査時に版築状基壇の下層から皇朝十二銭の「乳元大寶」が陶器に入った状態で10枚程出土していることから、これが基壇の地鎮に用いられたものとするこの基壇の祖形も平安期まで遡る。したがって、基壇の除去は止め、昭和36年度及び平成7年度調査を実施した折のトレンチを再度掘り上げ、内容の再度確認のみへと変更した。

まず、昭和36年度調査の10トレンチ北側掘り方を検出し、表土から約1.4m掘り下げた箇所アカホヤ火山灰層を検出した。当時のトレンチもこの面まで掘削してある。当時の調査報告書には、このトレンチの内容に関しては記されていないことから、当時の調査で確認できていたかは不明であるが、トレンチ北端に径約40~50cmの円形柱穴を検出した。また、平成7年度調査10トレンチの北端からも同様に表土から約1.4m掘り下げた箇所アカホヤ火山灰層を検出し、その面から掘り込まれている径約40

~50cmの円形柱穴を検出した。これら柱穴はアカホヤ火山灰層まで掘り下げられた後、精査時に検出されたと予想されることからアカホヤ火山灰層上面から掘削されたのか、その上層の黒色土層から掘削されたのかについては不明である。

これら柱穴の間隔は約5.7m(19尺)を測るが、調査面積も狭かったことからどのような性格の柱穴かは不明である。

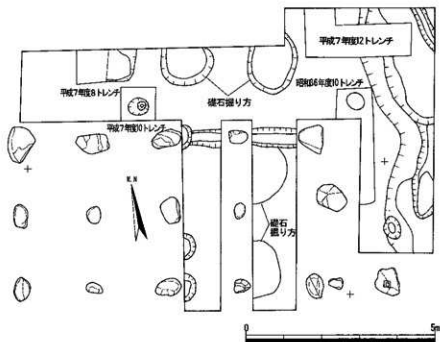


Fig. 4 日向国分寺跡第10次B区遺構実測図 (s=1/100)

《C区の調査》Fig. 5

C区は、B区と同様に金堂跡の痕跡を確認する目的で、墓地の参道部分に幅1.0m、総延長19.0mのトレンチを設定した。トレンチは北側の東西道路側から3度に分け南側に延長し掘削した。この箇所は江戸期の墓石も所在しており、当時から墓地として利用されてきたようである。但し、調査箇所には民家への水道管が埋設されているとの話を聞き、遺構の遺存は薄いと予想した。

調査の結果、参道幅のほぼ中央から2本の水道管、また、調査区中央に別に2本の水道管が埋設されていた。これら水道管は住宅等への枝管であるため外径でも20mm程度と細かったが、掘り方は50cm幅程で掘削してある箇所もあり、調査区全体がかなり攪乱を受けていた。攪乱を受けている水道管敷設時の掘り方床面は既にアカホヤ火山灰層が露出してしまっている箇所やアカホヤ火山灰層までもが削平されてしまった箇所もあり、平成7年度調査時の12トレンチで確認された金堂の掘込地業跡のような痕跡は確認できなかった。辛うじて攪乱から免れた箇所はアカホヤ火山灰層上層の黒色土層が遺存しており、この面から掘削されたと判断できる柱穴痕や窪みを数箇所確認したが、これが金堂に伴うと判断できるような遺構は、調査区幅が狭小なことなどもあり検出できなかった。

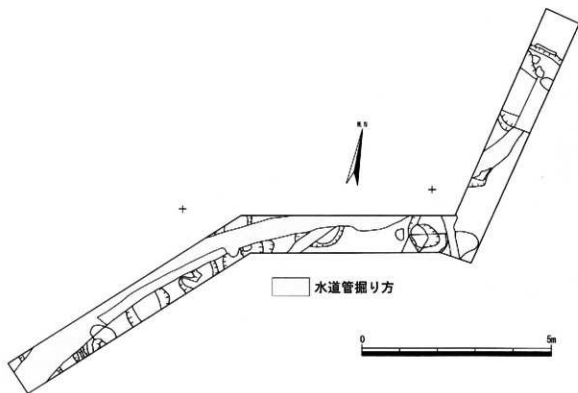


Fig. 5 日向国分寺跡第10次C区遺構実測図 (s=1/100)

《D区の調査》Fig. 6

D区は、推定講堂跡の北西側にあたるが、今日まで古い農業用倉庫が所在しており調査が実施できなかった。平成16年11月に地権者から農業用倉庫新築に伴う建築申請が提出され、地権者と協議の結果、平成16年12月8日から確認調査を実施した。

表土から約20～40cmを小型バックフォーにより掘削し、その後、精査し、遺構検出を行った。

調査の結果、トレンチ西側より南北に延びる幅50～70cmの溝 (SE001) を検出した。この溝から

は土師器片・瓦片などが出土した。昭和30年頃までこの場所に南北に延びる土堤が所在していたとの情報を得、当初は国分寺に伴う時期の溝の可能性も予想した。しかし、調査が進むにつれ陶磁器等が出土し、結果的には後世の溝であると判断した。また、この溝内には拳大の川原石が固まって出土した約50cm程の範囲が約4.0m間隔で3箇所確認できたが、これらは農業用倉庫の基礎であると判明した。

また、調査箇所の南側からSE001に切られる状態でSE002を検出した。この溝は幅1.0～1.3mを測り、先端が丸まっている。これと同規模で同形状の溝は中門及び西側四脚門の調査で確認した回廊に並行して廻る区画溝であり、SE001に切られている箇所の一部を掘削した結果、埋土内から土師器碗・瓦片等が多く出土した。溝の深さは最終的に約80cmを測ったことから創建期の区画溝であると判断した。

出土した遺物の年代は9世紀中頃に比定でき、他の区画溝内から出土した遺物と同時期である。この溝がここで途切れていることは、講堂の背後に僧坊跡等の建物が所在し、通路としての空間を確保した結果であろう。

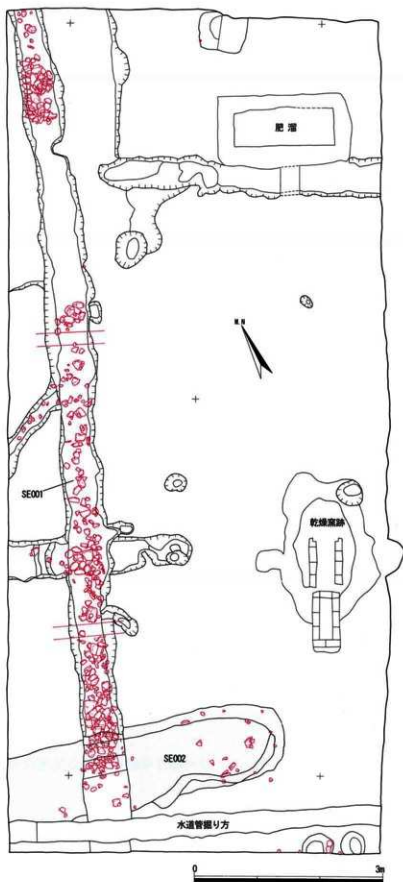


Fig. 6 日向国分寺跡第10次D区遺構実測図 (s=1/60)

《E区の調査》Fig. 7

E区は、農業用倉庫が所在する宅地及び畑地在り土地売買されることとなり、買主から平成16年12月に宅地分譲に伴う土地造成の申請が提出された。この地点は推定寺域北端に位置することから協議の結果、平成17年1月11日より確認調査を実施した。調査対象面積の約1,200㎡に幅2.0m、長さ4.0～10.0mのトレンチを10本設定し、調査面積は170㎡とした。

調査対象区の東側は平成13年度に確認調査を実施していたことから今回は調査を行わず、以前、所在していた倉庫の敷地部分を中心に調査を進めた。

調査の結果、1～4トレンチは倉庫建設当時の造成でかなり削平されており、既にアカホヤ火山灰層上面が露出している箇所もあった。調査対象地の西及び北（5・10トレンチ）は杉及び竹林であったことから既に樹根により、ほとんどが攪乱されていた。また、調査対象地の北側は平成7年頃に埋め立てられた寺域北東側の池に続く谷が所在していたが、この谷も昭和50年頃の土地造成に伴い相当の土砂で埋め立てられており、掘削は不可能であった。6～9トレンチを設定した倉庫南側も以前から庭木が植えられており、これらにより既に攪乱を受けていた。

遺構としては1～3トレンチの北側に幅20～30cmの溝を2条検出した。この溝は当初、寺域北端の柵列や塀に伴う溝の可能性も予想したが、溝内にはほとんど遺物が含まれず、寺の地割とも一致しないと判断したことから後世に農地として利用された際の溝であると判断した。

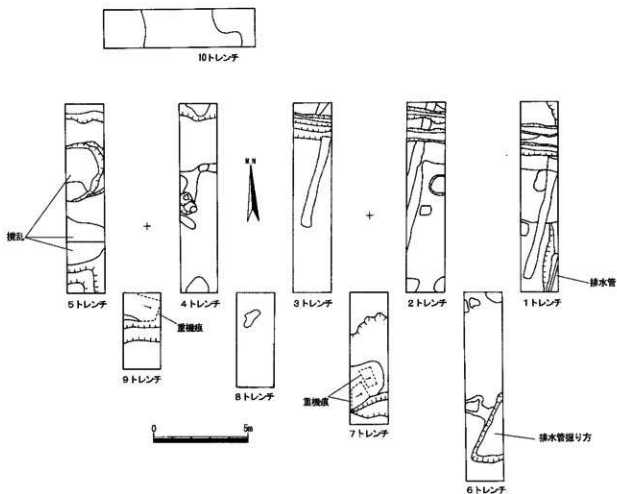


Fig. 7 日向園分寺跡第10次E区遺構実測図 (s=1/200)

第3節. 小結

今年度の日向国分寺跡の確認調査は平成16年4月26日から平成17年2月1日まで実施した。

西都市教育委員会が国庫補助を受け実施する日向国分寺跡の調査は平成7年度から実施しており、今年度で第10次となる。今年度は金堂跡の確認を最大の目的とし調査を実施した。また、年末に農業用倉庫新設や宅地造成に伴う申請がなされたことから、これら地点の緊急調査も行った。

昨年度までの調査で2時期の推定講堂跡、回廊に並行する区画溝、金堂の推定掘込地業跡、主要伽藍西側に取り付く四脚門跡、最低3時期存在したと想定する中門跡と回廊跡などを確認した。

推定講堂跡は方形柱掘り方を有し桁行き7間、梁行き4間の掘立・礎石併用建物の可能性がある1期目と円形柱掘り方を有し桁行き7間、梁行き2間ないし3間の掘立柱建物跡となる2期目を検出した。回廊跡・中門跡は3時期確認でき、中門のみ3期目で礎石建物となる。3期目には中門・回廊共に回廊の外側を廻る区画溝が埋没した後に建立されており、規模も拡大していることなどが明らかになった。南門は南門に取り付くと想定する築地塀の基壇らしき粘土層を確認したが、南門本体に関しての遺構は検出していない。金堂に関しては平成7年度の調査で掘込地業跡と予想される遺構を検出しているが、礎石痕跡の確認や掘込地業跡であると断定するまでには至っていない。塔跡は想定する地点を現在まで数箇所調査してきたが、現時点では全く不明である。

伽藍外側に関しては寺域端と想定する北・西端ともに宅地化がかなり進んでおり、調査設定箇所の制限や後世の攪乱などにより明確な遺構等は検出できていない。しかし、東端については平成元年度の調査で検出された南北柱列が寺域に伴う塀や柵列の可能性もある。また、推定寺城南西端では国分寺と地割りが一致する溝で囲まれた遺構も検出した。その他、回廊南西隅の西側からは簡易な竪跡らしき遺構も検出した。推定寺城西側からは平安期の土器・瓦片等が多く出土し、周辺にはかなりの集落が広がっていたことも予想できた。また、僧坊ないし食堂跡と想定する2時期の掘立柱建物跡も検出した。昨年度の調査では方形柱掘り方を有する東西3間、南北3間以上の掘立柱建物跡を伽藍東側に検出し、国司院等の建物の可能性も浮上した。

今年度の調査は当初、3箇所(A・B・C区)を予定していたが、倉庫建て替え及び宅地造成に伴いD・E区を含んだ計5箇所を対象とした。調査の結果、A・B・C区からは良好な遺構は検出できなかったが、A区で検出できる可能性のあった回廊跡が確認できなかったことにより、東西道路南側の墓地为金堂跡とした場合、回廊は金堂に取り付く構造ではないことが明らかになった。B区は旧五智堂基壇下層に柱穴等の遺構が所在することを再確認し、C区は調査区内に既に水道管などでかなり攪乱を受けていることが判明した。D区からは、これまで区画溝の北限が不明だったが、回廊に並行して廻る区画溝を検出し、講堂の北西側で東に折れ、途中で途切れることから講堂の背後に僧坊等の建物が所在した可能性が高くなった。また、E区は寺域の北端が位置すると想定してきたが遺構や遺物の出土状況から、この地点は寺域内に含まれない可能性が高くなった。

今回の調査でも金堂跡の明確な遺構は検出できなかったが、新たな知見が増えたことは、今後、調査箇所の設定や日向国分寺跡の全貌を解明する上で、大きく反映される結果となった。

米年度の調査は、推定講堂西側に所在する農業用倉庫下の調査と昭和36年度から調査を実施してきた箇所の座標計測等を最大の目的とし、再度、伽藍及び遺構の検討を実施する予定である。

今年度の調査では宅地開発などにより緊急調査を実施した箇所があり、以前までに確認した重要な遺構も開発の危機に直面している。今後、早急な遺跡の保護、現況の確保が必要である。

第4節. 日向国分寺跡伽藍地割について (Fig. 8)

現在までに伽藍配置及び寺域の復元を平成12・15年度の概要報告書の中で述べさせていただいた。昨年度までの調査で推定講堂跡・中門跡・回廊跡・主要伽藍西側に付随する四脚門跡・回廊跡に並行する区画溝などを確認した。また、今年度の調査でD区より東西方向の区画溝を検出したことなどから、今回、再度、伽藍の復元を試みる。また、今回は昭和36年度の調査報告書でも大川清氏が検討されているが、石田茂作氏の地割り法を用い日向国分寺の地割りについても検討する。

まず、伽藍配置については昨年度の所見と大差ないが、回廊外側を廻る区画溝は平成7年度の調査で南東隅が検出され、南西隅はその北・東側の調査で復元できた。区画溝の東西幅は回廊外側区画溝中央で計測すると約82mとなる。創建期及び第2期の回廊跡は区画溝内に納まるが、第3期は回廊南東端の調査で区画溝を埋めた後、柱掘り方が掘削されており区画溝内には納まらない。回廊は金堂ないし講堂に取り付くのが一般的であることから、昨年度の調査で推定講堂跡西側に回廊跡が確認できると想定したが検出できなかった。また、回廊が金堂に取り付く可能性もあることから平成12年度の調査箇所を拡大し、今年度A区として調査を実施したが検出できなかった。したがって、回廊は伽藍西側に付随する四脚門と接合すると想定しているが、東西道路直下に回廊が位置した可能性も残る。西側の四脚門前面で区画溝は途切れ、門への通路を確保する。四脚門の北側に因しては四脚門北側柱穴列中央の主柱北側延長に円形柱掘り方を1つ検出したが、この柱掘り方の北側延長線には同様の柱穴等は検出できず、築地塀らしき痕跡も確認できない。

昨年度の調査で講堂跡と推定する掘立柱建物跡を検出し、講堂も2時期存在したことが明らかになった。1期目の講堂は方形柱掘り方を有する桁行き7間、梁行き4間の掘立・礎石併用建物の可能性が高い。2期目の講堂は円形柱掘り方を有する桁行き7間、梁行き2間ないし3間の掘立柱建物である。梁行きが2間であれば切妻建物、3間であれば南面庇の構造になるであろう。これら柱掘り方から講堂の規模を復元すると1期目の講堂は東西幅16.8m、南北10.95m、2期目の講堂は東西幅18.9m、南北8.8mないしは12.0m程の規模となる。

これらの成果を踏まえ、今回、寺域及び伽藍地の地割りの復元を試みた。まず、寺域と伽藍配置が一致する方法で推定講堂の中心と中門の中心を2等分した位置に金堂を想定すると中門・金堂・講堂の間隔は約30m(100尺)となる。しかし、この距離では中軸線から東西の区画溝及び回廊跡と一致しない。したがって、寺域と伽藍配置が一致しない方法を採用すると、おおよそ回廊外側の区画溝と一致する。今年度調査のD区で検出した伽藍北西側の東西区画溝は伽藍地を南北に4分割した場合の最北端の区画を南北に2分割した線上に位置し、中軸線から伽藍地を西側に4分割した2区画目の東端で途切れている。また、西側の四脚門については寺域を4分割した中央にほぼ該当する。北東側の推定食堂跡は寺域を4分割し、北から南へ2区画目を東西に2分割した線上に建物の東端が一致する。推定食堂跡東側の南北柱穴列は地割りに一致しないが、地割りの南北線とは並行する。これらのことから、寺域東西南北の中央端の交点に東西南北それぞれの門を想定し、講堂北側の伽藍地と寺域の交点に僧坊跡を想定する。僧坊跡は中軸線から東西に2区画ずつの4区画の長さになる可能性もある。現在までに全く所在の不明である塔跡に関しては、中門北側の伽藍地南から北に2区画目、中軸線から東西に3区画目内に想定するが、東側は既に調査を実施した結果、塔跡と想定するような痕跡は確認できず、西塔配置の可能性が高い。上記のように地割りを復元すると寺域は以前まで想定してきた方2町よりも方1.5町程とした方が望ましい結果となる。

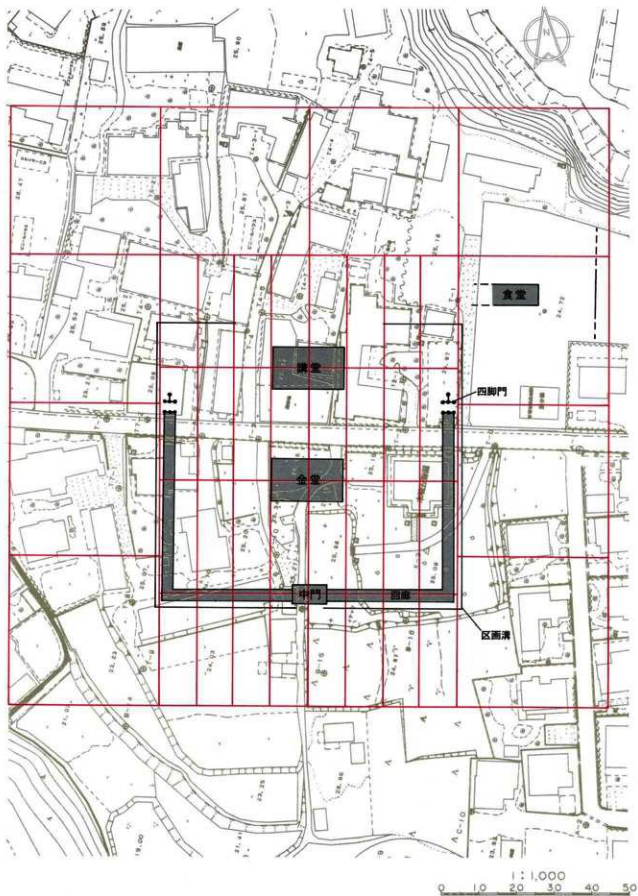


Fig. 8 日向国分寺跡伽藍地割想定図 (s=1/1,000)

図 版

(PLATES)

図 版 目 次

P L. 1

1. A区平成12年度トレンチ完掘状況（北より）
2. A区アカホヤ火山灰上面遺構検出状況（北より）
3. A区遺構完掘状況（北より）
4. A区遺構完掘状況（北より）
5. A区近世炭上層堆積状況（西より）
6. B区調査箇所全景（北東より）
7. B区掘削状況（東より）

P L. 2

8. B区完掘状況（南より）
9. B区平成7年度調査トレンチと礎石掘り方（南東より）
10. B区掘削状況（西より）
11. B区昭和36年度10トレンチ内柱穴検出状況
12. C区北側トレンチ完掘状況（北より）
13. C区北側トレンチ土層と伝塔芯礎（西より）
14. C区南側トレンチ完掘状況（南西より）

P L. 3

15. D区遺構検出状況（西より）
16. D区SE001掘削状況（西より）
17. D区SE001完掘状況（北より）
18. D区SE001完掘状況（西より）
19. D区SE001完掘状況（南西より）
20. D区SE002遺物検出状況
21. D区SE002遺物検出状況
22. D区SE002土層堆積状況（西より）

P L. 4

23. E区調査箇所遠景（北より）
24. E区1トレンチ完掘状況（北より）
25. E区2トレンチ北側溝完掘状況（北西より）
26. E区2トレンチ北側溝完掘状況（南より）
27. E区3トレンチ北側溝完掘状況（北西より）
28. E区5トレンチ掘削状況（北東より）
29. E区7トレンチ重機攪乱状況（北東より）



1. A区平成12年度トレンチ完掘状況
(北より)



2. A区アカホヤ火山灰上面
遺構検出状況(北より)



3. A区遺構完掘状況(北より)



4. A区遺構完掘状況(北より)



5. A区近世墓土層堆積状況(西より)



6. B区調査箇所全景(北東より)



7. B区掘削状況(東より)



8. B区完掘状況(南より)



10. B区掘削状況(西より)



9. B区平成7年度調査トレンチと礎石溜り方(南東より)



11. B区昭和36年度10トレンチ内柱穴検出状況



12. C区北側トレンチ完掘状況(北より)



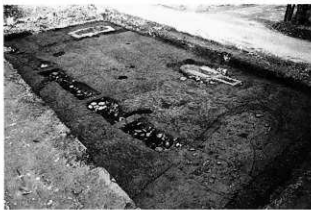
13. C区北側トレンチ上層と伝塔芯礎(西より)



14. C区南側トレンチ完掘状況(南西より)



15. D区遺構検出状況(西より)



16. D区SE001倒壊状況(西より)



17. D区SE001完掘状況(北より)



19. D区SE001完掘状況(南西より)



18. D区SE001完掘状況(西より)



20. D区SE002遺物検出状況



21. D区SE002遺物検出状況



22. D区SE002土層堆積状況(西より)



23. E区調査箇所遠景(北より)



24. E区1トレンチ完掘状況(北より)



25. E区2トレンチ北側溝完掘状況(北西より)



27. E区3トレンチ北側溝完掘状況(北西より)



26. E区2トレンチ北側溝完掘状況(南より)



28. E区5トレンチ掘削状況(北東より)



29. E区7トレンチ重機攪乱状況(北東より)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しなひせきはつくつちようさがいようほうこくしよ						
書名	市内遺跡発掘調査概要報告書						
副書名	日向国分寺跡						
巻次	第10集						
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第41集						
編著者名	釜瀬明宏						
編集機関	西都市教育委員会						
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL0983-43-1111						
発行年月日	西暦 2005年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)
		市町村	遺跡番号				
ひゅうがこくふんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおあざみやけあざこくぶ 大字三宅字国分	452084	1008	X=-99700.00 } X=-99850.00	Y=37600.00 } Y=37700.00	20040426 } 20050201	390
調査原因	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
遺跡所在 確認に伴う 確認調査	社寺跡 (国分寺)	奈良～平安	区画溝1条 溝3条 掘立柱建物跡 近世墓(方形)1基		軒先瓦片 丸・平瓦片 土師器・須恵器片 陶磁器片		

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第41集

「市内遺跡発掘調査概要報告書X」

日向国分寺跡

平成17年3月31日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 (有)河野印刷所

